

特集 戦後80年 今、私たちにできること

平和への訴え

戦後80年を迎え、当時を知る人が少なくなる今こそ、戦争を体験した人々の声を聞き、考えることに意味があります。今、私たちにできることを考えてみませんか。

人は同じ過ちを繰り返す
平和への思いを訴え続けていかないと

八島 正明 さん

昭和11年いなべ市藤原町生まれ。中学校の教員をしながら創作活動が続け、昭和36年に美術文化展初出品後、昭和50年に安井賞を受賞。作品は東京国立近代美術館、三重県立美術館他に収蔵される。春に自宅アトリエで展覧会を開催

終戦直後に亡くなった2歳の妹

気が付けばモノクロームの世界に引き込まれる——そんな力を持つ作品の数々。

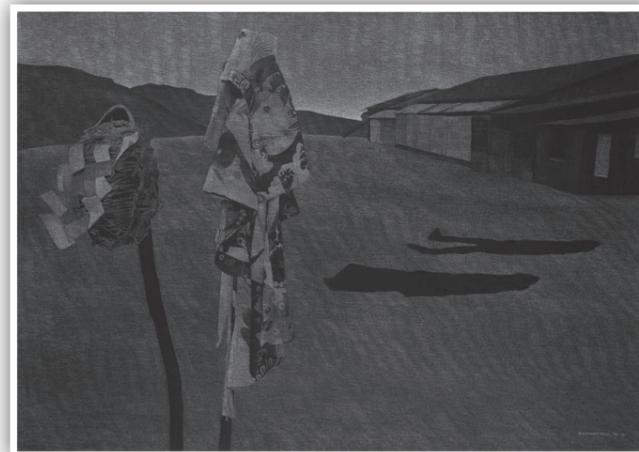
作者の八島正明さんは、いなべ市藤原町生まれ。実像のない影の世界を多く描いてきました。88歳になった今も、藤原町にあるアトリエで制作を続けています。表現の根底には、幼少期の戦争体験がありました。

八島さんは、3歳の時に父親の仕事の関係で藤原町から名古屋市に転居しました。5歳のころに戦争が始まり、6歳ごろには毎晩空襲があったそうです。

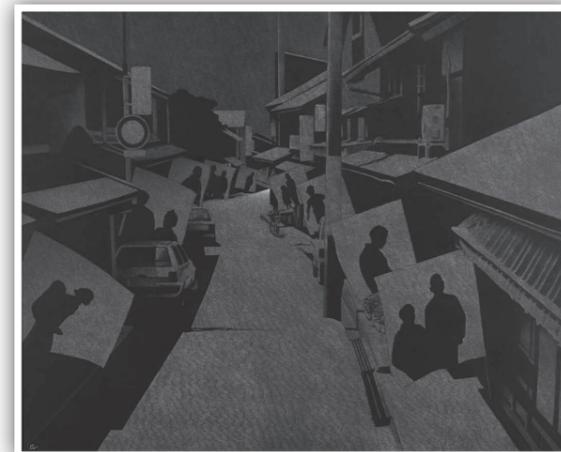
「B29がたくさん飛んできて焼夷弾を落とすんです。最初は、花火のようでキレイだなと不謹慎なことを思ったんですけど、そのうちに民家が燃えてパーッと火の海になって、毎晩、怖かったです」

昭和19年の夏、小学二年生になった八島さんは、祖父母がいる藤原町へ疎開してきました。翌年には、両親と姉妹、東京や桑名の親戚も疎開してきたため、一時は祖父母の小さな家に26人で暮らしていました。

祖父の小さな畑では収穫物も少なく、次第に食料に困窮していきました。そんな中で終戦を迎えます



【忘れたわけではない】愛知県美術館所蔵
2歳で亡くなった妹を描いた作品。着せてやることの無かった晴れ着の奥には、父と母の影を描いた



【旗の立つ町】三重県立美術館所蔵
掲げられた旗に描かれているのは、戦地へ家族を送り出した人々の影。国家より個人が大事であるべきとの思いを表現した作品。街並みは、北勢町阿下喜の西町通り



【影を呼ぶ影】
中央の青年は、若くして戦死した八島さんの親戚。その母親が自分の子どもに「会いたい、会いたい」といつまでも心の中で叫ぶ姿を表現



【影の花(征かされた人)】
描かれた人は、八島さんの親族で戦死した人たち。「戦争がいかにひどいものかを、何も教えられないまま徴兵された」ことを「目隠し」で表した

【独自の画法】キャンパスに白い絵の具を塗った後、上から黒の絵具で塗りこみ、木綿針で削ると、黒の中から白い線が浮かび上がってくる画法。筆の代わりに、針仕事をしていた母の木綿針を割り箸に付けて使う

が、食糧難によって幼い妹は栄養失調に。病院に連れていくこともできないまま、栄養失調と天然痘で、妹は2歳で亡くなりました。

広島平和記念資料館で見た影

その後、大学在学中に訪れた広島平和記念資料館で見た石段の展示が、八島さんを絵に向かわせました。

「係の人の話では、石段に人が座っていた時に原爆熱線が来て、人は蒸発したが、人が居たため熱線を遮断して人の影だけ残った、と。その石段の展示を見て、急に妹を思い出したんです。この原爆に当たっ

た人は影を残したけど、僕の妹は写真も何も残っていない。何か妹を絵で残そうと思ったんです」

肉体が減んでも、周りの人たちの中での魂は減びない

絵に「影」を多く描く理由を、八島さんは「肉体が減んでも、名前や身近な人の中の記憶といった魂(影)は減びないから」と話します。

「黙っていたら、人は同じ過ちを繰り返してしまう。平和への思いを、訴え続けていかないと、と思います」八島さんは、影のように減びない「平和への思い」を、今もキャンパスに描き続けています。

いなべでの戦争の記憶

このまちにも、戦争は現実のものとして存在しました。戦時中の暮らしや学校生活、戦地に向かった家族と残された人々の思い…。
 当時を生きた人たちの記憶とともに、80年前にこの地で戦争があったことを見つめてみませんか。

地図出典：地図・空中写真閲覧サービス（国土地理院）（1945年4月陸軍撮影）
 ※写真中央に映るのは北勢町阿下喜地区



藤井 賢治さん 94歳、絹枝さん 89歳
 (藤原町日内)

【賢治さん】 学校では、校庭で芋を栽培したり、出征する兵隊さんを見送ったりしていました。国民学校高等科を出て、桑名市播磨にある工場に勤務し、そこで桑名空襲にあいました。防空壕に逃げたけど入れず、とっさに溝に伏せて、命からがらに逃げました。なんとか歩いて藤原に戻ってきてからも、食べるものに困りました。わずかな食べ物や日用品を当時の村長が分配して、みんなで分け合って暮らしていました。

【絹枝さん】 昭和17年に父に召集令状が届き、昭和20年7月にニューギニアでマラリアにかかり亡くなりました。父と同じ部隊だった人が、終戦1年後に「やっと来れた」と訪ねてきて、父の最期を教えてくださいました。

父の入隊後に母は、牛を使った米作りやカイコの飼育などで無理がたり、冬になると病気で寝込むようになりました。私も農作業を手伝いましたが、作っても供出で取られてしまうので、麦を混ぜたご飯を食べていました。



岡 正文さん 85歳 (北勢町新町)

警報が鳴ると、仏壇にある仏様の掛け軸をリュックに入れて、防空頭巾をかぶり、300メートル離れた防空壕に向かって、田んぼのあぜを必死に走った記憶があります。焼夷弾から逃れるための防空壕は、地区のあちこちにあり、近所の子供の防空壕に入れてもらったこともあります。

父は日中戦争と太平洋戦争で徴兵され、昭和19年に南方で病気になり帰国後亡くなりました。田んぼと畑をしながら、母は苦勞をして姉と僕を育ててくれました。今までに「親父がおってくれたらなあ」と思う瞬間もありました。こんな思いを若い人にしてほしくないです。戦争は本当にはいけないと思います。



伊藤 淳治さん 89歳 (北勢町其原)

小学3年生の時に、家族と一緒に大阪から疎開してきました。山郷村国民学校（現在の山郷小学校）では、毎朝、掃除・敬礼から始まりました。毎日、授業開始ごろになると警報が鳴り、防空頭巾を被せられて家に帰されました。毎日決まった時間に、名古屋方面に向かって飛んでいく空いっばいのB29が見えました。

終戦間際の6月には、平野新田の西側に爆弾が落ちました。その日は、警報が鳴り、帰宅途中で友達と道沿いの小屋で遊んでいた時に「ドカーン」と大きな音がしました。学校で教えられていたので、すぐに目と耳を手で隠して身を伏せました。近くの建物のガラスが割れ、地震よりも大きな地響きで、すごく怖かったです。爆弾の他に、学校の近くの畑には、何日も焼夷弾が落ちたこともありました。

麻生田駅で旗を振り、兵隊さんの見送りもしたけど、心から「万歳」と思えなかったです。若い人を戦争に送り出す世にはいけないと思います。



加藤 美代子さん
 81歳 (員弁町松之木)

父は昭和19年に召集され、中国で終戦を迎えた後にシベリア抑留され、昭和20年12月に亡くなりました。当時、私は2歳でした。小学3年生のころに、父と一緒にシベリア抑留されたという人が「生き残った者の務めだ」と言って訪ねてきました。「シベリアでは、夜になるといつもあなたのことを話していたよ」と教えてくださいました。父は「いい子に育ててね」と伝えたそうです。若い人たちには、平和の素晴らしさを知ってほしいです。

今なお残る戦争の跡

大安町門前の防空壕

大安町門前に残る防空壕は、梅戸井村国民学校（現在の笠間小学校）の奉安殿の御真影を戦火から守るために掘られたものです。実際には、一度も御真影を入れることはありませんでした。

現在は崩れて、その一部分が残っていますが、当時は何人もの人が入れるほどの大きさでした。



「御真影を退避させるための防空壕で、学校の先生が管理していました。子ども心にこの防空壕を誇りに感じていました。昭和20年の四日市空襲や桑名空襲の時は、近所の人たちがこの防空壕の前に集まり、空襲の炎を見ました」



萩野 かず子さん
 88歳(大安町門前)

戦時中の暮らしを知る場

いなべ市郷土資料館

○住所 藤原町上相場 838
 ○電話 46-2526
 ○休館日 月、火、年末年始



いなべ市郷土資料館は、昔の人が使っていた生活用品などを数多く展示しています。

展示コーナー「平和への願い」では、戦時中の住民の暮らしが分かる防空頭巾や代用陶器などが展示されています。



戦時中、実際に使用されていた品々を展示

記憶から、未来への伝言

戦争をくぐり抜けた人々の言葉には、平和を願う強い思いがこもっています。
あの戦争の記憶の中から、未来への伝言をお聞きました。



岡本 茂樹 さん
104 歳（北勢町其原）



▲岡本さんが乗艦していた戦艦伊勢
資料提供：大和ミュージアム

戦争は絶対にしたらあかん

死を覚悟していたあの頃

岡本さんは、戦時中に三重師範学校（現在の三重大学）を卒業し、1年間小学校勤務した後、師範徴兵として広島県の大竹海兵団に入団しました。そこで戦艦伊勢に配属となり、乗組員として火薬庫長に就きました。弾薬庫は船の底のところにあり、分厚い鉄板に囲まれていたため、戦艦が被弾したら「まず助からないだろう」と覚悟しながら乗艦していたそうです。ポタン、ポタン、と落ちる水滴を飲み、のどの渇きに耐えながら任務に当たっていました。

一度、広島で訓練を受けているところに、弟が会いに来てくれたことがあります。お互いに最期を意識した再会だったそうです。

広島で迎えた8月6日

昭和20年8月6日、広島市に原爆が投下されたときに、岡本さんは大竹海兵団練兵所にいました。閃光を見た後、間もなくすごい爆風を受けたそうです。2、3日後に軍の命令で広島市に救助に向かい、すさまじい光景を目にしました。

その後、兵舎内のラジオで玉音放送が流され、終戦を迎えたときは「やっと終わったんだ」という思いになったそうです。

遺骨も届かなかった弟の死

戦後、岡本さんは弟が21歳でフィリピンで戦死したことを知ります。弟の戦死の知らせに白い箱を渡されましたが、中には紙が入っただけでした。母は弟の死を信じられなかったのか、毎日、麻生田駅まで迎えに行きました。母のその姿を見るのがつらかったそうです。戦後、教職に戻った岡本さんは、常々「戦争は絶対にしたらあかん」と周囲の人たちに話しました。



因 慶紹 さん
88 歳（大安町大井田）

行われた慰霊祭で、同行した青年が、拾った頭蓋骨を胸に抱えて放そうとせず、「お父一さん！」と叫ぶ姿を目の当たりにして、こみ上げるものがありました。

平和について真剣に考えるために、市の郷土資料館でもいいし、広島や沖縄の資料館などに行ってほしいです。戦争があったことを、忘れないでほしいです。

平和を真剣に考えるとき

全校生徒や婦人会などの大勢の人に、「万歳」と梅戸井駅で見送られた父。当初、父は中国に派遣されましたが、昭和19年に沖縄へ転属に。その知らせがあった時は、家族で中国よりも距離が近くなったことを喜びました。でも、激しい沖縄戦で、父はガマ（洞窟）の野戦病院で亡くなったそうです。

終戦30年目に、沖縄での遺骨収集事業に参加しました。20日間かけての遺骨収集では、沖縄戦の悲惨さに言葉が出なかったです。鉄砲の弾や手りゅう弾があっても構わずに、そこら中にある遺骨に手を伸ばして無我夢中で収集しました。摩文仁の丘で



▲絵が得意な因さんが描いたもの。沖縄県糸満市の摩文仁の丘での忘れられないシーン



日下 正 さん
80 歳（大安町片樋）

戦争は家族の絆を断つ

父は昭和18年12月に招集を受け、丹生川駅から見送られ京都の駐屯地へ。そんな中、当時1歳の兄が病気で亡くなりました。そのことを母は、開拓勤務部隊に編入されて駐屯地で訓練をしていた父には伝えませんでした。最後の面会の時に、伯父から息子が亡くなったことを知らされた父は、その場で泣き崩れたそうです。その父は、昭和19年7月にサイパン島で34歳の若さで戦死しました。その後生まれた私は、父の顔を知りません。母が父と一緒に居たのは、3年だけ。母は、残された広い田で農作業をしながら私を育て、64歳で亡くなりました。

若い軍服姿の父の遺影、その隣には白髪交じりの母の遺影が掲げてあります。二人の不釣り合いな姿を見ると悲しみがこみ上げてきます。戦争は家族の絆を絶ちます。悲しみを生む戦争を、絶対にはいけません。

サイパンでの慰霊祭で祝詞を読み上げる日下さん▶



戦後80年目の 戦没者慰霊祭

5月3日（土）、北勢町の麻生田野戦没者記念碑前で戦没者慰霊祭が行われました。「平和の鐘を鳴らす会・いなべ」と神社庁員弁支部が合同で開催。

碑には、日清戦争・日露戦争・太平洋戦争などの戦没者2,024人が祀られています。

参列した遺族の皆さんは、亡くなった家族へ思いをはせ、静かに手を合わせていました。



1. 平和の鐘 2. 冥福を祈る参列者

平和の鐘を鳴らす会・いなべ

戦後80年が経ち、戦没者の遺族の高齢化が進んでいます。次世代に平和を引き継ぐため、「いなべ市遺族会」から「平和の鐘を鳴らす会・いなべ」に変更しました。

理事長の若松芳弘さんは「昨年、戦没者のお孫さんがこの会に入ってくれました。さまざまな年代の人と協力をして、戦争をしない世の中にしていきたい」と話してくれました。

幻想的な空間で平和を再確認

竹あかりの会

慰霊碑を囲むように並べられた竹あかりを見て、平和への思いを深めるイベントです。

日時 8月23日（土）17:00～
場所 麻生田野戦没者記念碑前
主催 平和の鐘を鳴らす会・いなべ
問い合わせ 090-3157-2530

次世代に平和をつなぐ

悲劇を繰り返さないために、歴史から学ぶ——。
戦争の悲惨さを見つめ、平和の尊さを次世代につなげている取り組みを紹介します。

語り継ぎ部として戦争を伝える



民上 眞由美 さん

賀毛神社で2021年から地域の人を対象とした歴史講座「地域の歴史を知る会」を開催。聞き取り調査を基に「三重の戦争遺跡」（つむぎ出版）の執筆に三重県歴史教育者協議会の一員として参加



弾薬箱を持参して、子どもたちに平和学習を行う民上さん

「伝える」ことが、私の使命

北勢町垣内の賀毛神社権禰宜の民上眞由美さんは、同神社での歴史講座や市内小学校への平和学習で、郷土の歴史を伝え続けています。

小中学校教諭だった民上さん。歴史を調べている中で、先人たちの手記に書かれていた「(戦時中) どうして先生は私たち(子ども)を守ってくれなかったのか」という一文にハッとしたそうです。民上さんは「教え子を戦場へ送るような世の中にしてはならない」との思いを強くし、そのためには、歴史を学び、伝えることが大切だと考えました。

「戦後生まれの私は、戦争体験者ではないので語り部ではありません。でも、体験者の父が歌う軍歌を聞いて育ち、戦争が遠い世界のものではないことを知っています。私たちの世代は、先人たちから学んだことを未来ある子どもたちに伝えていかなければならない。「語り継ぎ部」としての使命を担い、平和な世界をつくりたい。そう思い、子どもたちや地域の人たちへ伝えることを大切にしています」

青い目の人形*など、地域に眠る歴史を掘り起こして伝えている民上さん。子どもたちの平和な未来のために、「伝えること」の大切さを教えてくれました。

※ 100年前に、日米友好のためアメリカから贈られた人形

市内に残る戦争の跡 民上さんが平和学習で子どもたちに伝えている戦争遺跡



武器を作るために、鉄や銅でできたものは軍に供出されました。寺の梵鐘(釣鐘)も供出された後、四日市市の軍需工場で空襲にあい、被弾しました。写真は北勢町下平の説教所の梵鐘で、20以上の穴が開いています。



大砲の弾を入れていた弾薬箱が、市内各地で確認されています。本土決戦のために集められた弾薬とみられ、学校や民家に隠されていました。弾薬は、戦後にアメリカ軍によって員弁川などの河原で処理されました。



戦前、戦意高揚のために御真影(天皇皇后の肖像画の写真)が全ての学校に下賜されました。御真影を祀るための建物が奉安殿です。毎日、子どもたちが最敬礼していました。写真は、戦後に梅戸北神明神社の本殿になった奉安殿です。

員弁中学校の平和学習・平和宣言

今、私たちの世代が戦争の無い世界にしないと

6月3日(火)、員弁中学校3年生は修学旅行で広島平和記念資料館を訪れ、平和や歴史についての学びを深めました。生徒たちは、3歳で被爆した語り部の脇舩友子さんの話に耳を傾け、平和への訴えである平和宣言をしました。

後日、修学旅行で得た学びを新聞にまとめ、現地で感じた思いを班ごとに発表。

松田壮真さんは「実際に話を聞いたら、一つ一つが重く感じました。被爆した人の皮膚がただれた姿を、脇舩さんが幽霊と例えて語ったことが印象的でした」と話し、日紫喜着さんは「戦争の悲惨さ、恐ろしさが体中に伝わってきました。どんな理由があっても戦争はしてはいけません。今、私たちの世代が戦争の無い世界にしないと」と、決意を新たにしていました。

現地を見て、実際の体験者の声が心に響いた生徒たち。平和への思いが強く刻まれていました。



1. 戦争の悲惨さを伝える原爆ドーム 2. 脇舩さんの話を聞く 3. 平和宣言「戦争は遠い国の出来事ではない」 4. 班ごとに新聞を発表 5. 伊藤菜乃さん「路面電車を降りてすぐに原爆ドームが目に入ったとき、本当に原爆が落ちたんだと実感しました」 6. みんなで作った新聞の前で

info 映画を通して平和について考えよう

「愛、そして絆」のメシエ映画館 2025



あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。



©2023「あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。」製作委員会

【日時】9月20日(土)

開場 13:00 ~、上映 13:30 ~

【場所】北勢市民会館

【入場料】無料(入場券なし、先着順で入場)

人は同じ過ちを繰り返す 改めて今、「平和への訴え」を

今日の平和な社会があるのは、先人たちの努力と希望の積み重ねの上に成り立っていることを忘れてはなりません。

しかし、戦後80年が経ち、戦争の記憶の継承の難しさに直面し、平和の尊さを理解する機会が乏しくなっています。

さらに今、世界の情勢が不穏な空気に包まれ、平和は当たり前ではなくなりました。

過ちを繰り返さないためにも、改めて、私たち一人一人ができる「平和への訴え」とは何かを考えてみませんか。